

小島信夫『小銃』論

——「陸地」をキーワードとして読み直す——

前田 角藏

序、アレゴリツクな反戦小説

小島信夫は安岡章太郎、吉行淳之介、庄野潤三らとともに「第三の新人」として位置づけられている作家である。

『小銃』（「新潮」一九五二年（昭和二十七年）十二月）は、その小島の代表的な作品の一つである。

六章よりなるこの短編小説は、太平洋戦争末期（一九四二年頃）、二二歳で兵士として中国の蒙疆に派遣された初年兵「私」を語り手（私）が語るといふゆる私小説のスタイルをとっている。もちろん、ここでの主人公「私」は作者小島信夫ではない。注1、

それにしても、この「私」は余りにも奇妙で、悲惨な軍隊体験の持ち主である。射撃にかけては右にでるものがない兵士でありながら初年兵訓練の後半期、作業員と思われる中国の女性を虐殺せよという命令をうけ殺してしまう

ことで精神的な錯乱状態に陥り、しだいに荒廃していく。

性病のために入院したり、銃のユウテイの紛失から営倉いりになり、幹部候補生の試験も受けずひとりだけ二等兵にとどめ置かれ、しかも八路軍との交戦中、銃を焼き捨てようとして、それを止めようとして斬りかかってきた上官のほらを誤って撃つことになり十八年ほどの刑を受ける。数年後、終戦によって免罪され、その翌年、天津で武器回収の使役につきながら帰国を待っているが、中国人を殺したという罪悪感と恐怖心に追い立てられているいうところで小説は終わる。たしかに、ざっと見ただけでも、「小銃」がかなり奇想天外な小説であることがわかる。国家から貸与された銃を女の身体に見立てるといふことも不謹慎だし、その銃を焼き払おうというのも、さらには暴発にせよ上官を撃つてしまうということも、また、昇進を望まず、むしろそれを拒否することなどすべてそうありえない、そ

の意味で荒唐無稽なところのある話である。たとえば、日本の軍隊が中国人を遊びのように虐殺したことも、また銃の先で尻の孔にいれられそうになる軍内部でのいやがらせ、屈辱、セクハラはいうまでもなく、自殺さえ強要される話などもありえたことではあつても、やはりそうありえないことで、「小銃」ではとてもありそうには思われぬ事柄、事件などがあたかも日常的にあり得た「私」の出来事として語られている。実は、この「小銃」というテキストは、単純なりアリズム小説でもなければ社会的な軽い風刺小説などではなく、日本人あるいは兵士が戦争を通してどのような悲惨な心的状況(精神錯乱)を抱え込まざるをえないかをいささか誇張し、アレゴリックに語ろうとしたテキストなのだ。

しかし、「小銃」は必ずしもそのようなアレゴリックな小説として理解されてきたわけではない。たとえば、畑有三は、「人間生活での(手)の意義の重さと、同時にその恐ろしさの描出を軸して、現実の苛酷な力によって圧殺されていく無垢な人間の魂を描いたものである」とし、「小説全体が絶対自由の幻を憧憬するメルヘンであり、また幻の喪失を嘆く挽歌」注2、だと確信をもって語り、また紅野謙介もこの小説を、最初にあつた性のファンタジーの世界が、最終的に、「もはや性のファンタジーのどこにも成

立しない場所で「私」は打ちのめされる」物語だと述べている。注3、いずれも、人間の「無垢な」あるいは(「ファンタジック」な「魂」が「現実の苛酷な力」によって踏みつぶされていく物語として理解している。

だが、この小説は人間の「無垢な」あるいは(ファンタジック)な「魂」がまずあつて、しかし、それが「現実の苛酷な力」、ここでは戦争というものがそれらの無垢なる「魂」を奪っていくといった月並みな「戦争」Ⅱ(悪)的な枠組によって成り立っている世界ではそもそもなかつた。本拙論ではその辺りの事情を深く探ってみたい。

【一】「陸地」と文学——その意味を考える

これは「小銃」の冒頭である。

私は小銃をになつた自分の影をたのしんだ。日なた、軍靴の土煙をすかしてうつる小銃の影の林の中で、ふとその影をさがすということを私はいくどもした。その林はひびきと共に動いて行く。さがしあてた自分の小銃の道う地面が、なつかしく、故郷のように思われるのだつた。

一一歳で兵士として中国の蒙疆(もうきよう)に派遣された「私」は、三八式歩兵銃を偏愛し、その銃をになつた「自分の影」が地面に映し出されることを通して日本兵としての自分を自己確認するとともに、その銃をわかれてきた二六歳の年上の女性と見立て、その小銃の銃口、弾倉、前床などにふれることでまさに徴兵によつて引き裂かれた女との(性の日常)を取り戻そうとしている。射撃にかけては右に出るもののない「私」はイ62377という番号のその小銃の占有が許され、こうした少しありえない初年兵訓練一期の生活を送っている。ところで、銃をになつた「自分の影」を通して自己確認をするこの冒頭の場面を私たちは、少し変わったナイーブな一人の青年兵士の日常としてあっさり理解しそうである。しかし、この場面の描写が、作者小島信夫のかなり根底的な文学観から導き出されていたのだということを知ると事態は一変していくことになるだろう。

小島信夫は、「おそれとはずかしさ(2)」(『戦後思想の発見』戦後日本思想大系13 一九六九・二筑摩書房)所収の中で、「作者の独創はくりかえすものの中から、くりかえさないものを発見して、くりかえすものの意味を含めて探知することなのですが、それは、私たちが、見たり聞いたり、歩いたりして実感している陸地のもっている堅

さというものが条件となつていのように思われるのです。」といい、「陸地は堅固なものと心の底で思っていたのに、陸地が突然、解体して、もう一度自分の陸地を、自分の周りに築き上げること、これが作家が筆をとる必要にせまられたというべき事情なのでしょう。」そして、さらに「こうした手のこんだ経験を経て、作家は陸地を回復し、「共通の現在」という意識をもつことで、つまり共通の陸地上の現在を感じることで、逆説めきますが、現在すらも、ある程度、過去と同じく堅固な感じのものになることができる」と語っている。一般に、「変化が一部分であるという、このありがたい状況によつて私たちは、陸地の意識と、生きていくという意識とをもつことができるようです」というのである。

ここで、小島信夫が何を語ろうとしているのか明らかであろう。普段、われわれは「地面」「陸地」などあるかどうか考えないであろう。そこに(ある)ことが当たり前であり、それを前提として自分の人生や将来のことなどを考えているからである。しかし、ここで大切なのは、この「小銃」の語り手(私)は、日本での「地面」「陸地」を暴力的に奪われて中国の「地面」「陸地」にたたされ、(宙)に浮いた状態にある「私」が何をしようとしているかを語っていることである。「私」は、日本兵であることを象徴す

る道具、武器としての「小銃をになつた自分の影」を中国の「地面」に確認することで新しい自分なりの「陸地」を求めようとしているのである。その「地面」が、なつかしく、故郷のように思われる」のは、この「私」が日本を懐かしく思っているのではなく、やつと少し自分なりのいつもの日本の「陸地」を感じ安堵しているからである。中国に派遣されるといふことは、単に空間をAからBへ移動することではなく、存在条件そのものを奪われることとして小島信夫は深く理解していたのである。

こうして「語り手（私）」は、「小銃をになつた自分の影」を小銃の林立する「影」絵の「地面」の中に探し出して確認したり、あるいは次の章で述べるように、「私の女になつた」小銃の銃口、弾倉、前床などをなで回すことで、女との準強制的な（分かれ）からくる（哀しみ）に耐えて生きていく「私」の日常を語っていく。それは、未練をひきずって「性のファンタジー」（紅野謙介）の世界に埋没しているのではなく、中国に連れてこられて「陸地」と「愛」を一挙になくした「私」が、国家から貸与された三八銃を逆手にとつてあまりありそうもない「私」なりの新しい「陸地」と（愛）すなわち今の「私」なりの日常、アイデンティティを切実に探し求めている姿なのだ。しかし、この小銃の林立する「影」絵のような「陸地」は戦場であり、や

がて反日の「討伐」活動へと向かうと呑気に「小銃をになつた自分の影」を「地面」に確認するといったこともできなくなるとともに、「あなたの鉄砲になつて」「いつもあなたのそばにいる」といった女の（愛）のささやきなどまたたくまに消えていくことになる。国家から貸与された愛銃は、「私」の存在の不安を癒す「道具」ではなく中国の（女）を殺す武器、つまり忌まわしい「悪魔」へと変貌し、瞬間に「私」を日本軍という組織の一部（歯車）へと取り込もうとし、しかし、それにうまく順応できない「私」の精神は錯乱し、やがて役立たずの兵士へと追い込まれていくのである。その意味において、「小銃」は、中国に派遣された普通の若者（兵士）が、その人間性喪失の危機に直面させられる軍隊組織の中でいかにして精神的な錯乱状態へと追いやられていくかを象徴的に、アレゴリックに語り出している小説だといえるのである。注4、

【二】小銃と年上の女性と「私」——「反日」の女の虐殺から精神の錯乱へ

軍隊に徴兵されるというのは、「陸地」を奪われるだけでなく、国家によつて女性との愛をも奪われるということでもあった。「小銃」では、六つ年上の女とのいわゆる不

倫の愛が語られている。ここでは徴兵によつて強制的に切斷された（愛の日常）を「小銃」をさわることで何とかその（愛の日常）を取り戻そうとしている。「私は一日に小銃のあそこ、ここにいくどもふれた。その度に私はある女のことをおもいだした。おもいだすために銃にふれた。」という具合である。

「私」と銃と女との関係が次のように濃厚に語られる。

私は二十一歳で内地をたつ時、二十六歳の年上の女で出征中の夫をもつ人妻に、あたえられ得る最大のことをのぞんだ。夫の子供をやどしている女を、実家へ送りとどける途中、行きあたりばつたりの寒駅の古宿で、私はその七カ月にふくらんだ白い腹をなで、あちこちの起伏、凹みに顔をむせばせるだけで別れた。さわらせて、もう少しさいごだから、という私の声に、女は贖罪のつもりか、目をとじてあけず、用心深く私の手をにぎつて自由にはさせなかつた。漠然とした手ざわり、匂い、それから黒子が手がかりであった。

銃把をにぎりしめると、私の存在がたしかめられた。そこから生命が私の方へ流れてくるように思われた。銃把は女がみごもる前の腰をおもいおこさせ

た。私はかなしみをこめてその細い三八銃の腰をにぎりしめた。いたいたい慎ちゃんやめて、むりよ。私にはそういう声ができこえるようだった。私はあたることの出来なかつた。腕力を小銃にむけた。私はかなりの腕力があり、銃把をにぎりしめ地面からまつすぐ垂直にまであげ、しばらくそのままの位置にとどめることも楽にできた。

小銃は私の女になった。それも年上の女。しみこんだ創、ふくらんだ銃床、まさに年上の女。知らぬ男の手垢がついて光る小銃。

こうした場面を「性のファンタジー」（紅野謙介）と言えなくもないが、「私」の空想の中で、女はさらに次のように（ささやく）のである。

慎ちゃん、あなたはきつと可愛がられるのね。あなたは可愛がられる人。それで大安心なの。私だけでないのね。それで大安心なのよ。あの人にも気がすむの。ひみつだけど、この子、主人ではないよ。うよ。そう思いたいわ。男ならあなたの名前とるの。ほんとうは私こわかったの。年上だと思えなくなりそう。したらもうおしまい。あなたに可愛がられ

るようになったら。わかって。でも私、いつもあんなのそばにいる。そう、あなたの鉄砲になって。

「私」は女と分かれる最後の日、「夫の子供をやどしてある女を、実家へ送りとどける途中」、「さわらせて、もう少しさいごだから」とたのんだ。しかし、その最後のことを拒否され、「私」は中国に派遣され初年兵訓練をうけることになった。そこで、(国家から貸与された三八銃)を分かれてきた女と見立て、「性のファンタジー」と称される時間を生きてきたわけだが、それができたのは、最後の一線をこえさせなかったかわりに、女が最後にいった「でも私、いつもあなたのそばにいる。そう、あなたの鉄砲になつて」という約束のことがあったからである。「私」はこの中国の蒙疆において(女)の別れ際のことば、ささやきを想起しながらそれに助けられて女との「性のファンタジー」と擲擻される空想の世界を生きていたのであった。ところが、初年兵の一期の訓練が終り、二期の外での訓練が始まると、「私」の状況が一変してくる。

初年兵の一期の訓練が終るころ、古年兵が討伐から殺氣立って帰ってきた。翌日私たちは例によって城外の演習場へ駆足で向った。阿片になる白いケシ

の花が菜種のようにくずれた城壁の下をとりまいて咲いていた。路傍の露店では濛々と立ちあがる土埃の中で、豚の脚や爪をつめた鍋がたぎっていた。銃の林が移動して行つた。そして私は又しても私なりのたのしみにふけるのだった。小銃は私の肩の上で歓呼の声をあげた。

初年兵の半期の訓練が終わると、「私」たちは、城内の演習場から城外の演習場へとかりだされる。そとは日本軍の侵略への抵抗が展開されているまさに戦場であった。いわば「討伐」が日常的に展開され、その実地訓練がおわる頃、兵士として「一人前」ということになり多くは一等兵に昇進することになる。それにしても、兵士として「一人前」になるとはどういうことなのか。

「小銃」は、実はこの(問いかけ)に見事に答えているのだ。最初、「私」はここが敵地で戦場であることを強く意識していなかったので、城外の「銃の林」の風景を見やりながら、銃をになつた「自分の影」を探し出してみたり、あるいは女との「たのしみにふけ」、女も「私の肩の上で歓呼の声をあげ」という具合であった。ところが、大矢班長(上官)は「穴を掘る! この位の大きさ。深さ二米、所要時間は二時間。」と命令する。この時になつても、「私」

は事態の深刻さが読めとれず、「(僕はこうして穴を掘る。待っておいで。すぐ終る。僕は他人より早い)」と声をかけ、作業をはじめた。「私」はそれが、「虐殺」＝殺しの準備だとはしらず、「労働」と思い、「私には労働という労働がみんなたのしかった。」というのである。

ここではまだ、「私」は反軍的な兵士ではなく、「労働という労働がみんなたのしかった」という青年である。それどころか、「私」は、「大矢班長を愛していた。申分のない軍人であった。軍人としてこの人に出来ないことはなかった。私は商業学校の時から剣道も二段で主将をしていたが、軍隊でおぼえたこの人の剣にはかなわなかった。私が得意にしていた珠算さえもこの人にはかなわなかった。」というところで、尊敬しているのである。ところが、その大矢班長が、中国兵や女性の工作員など掘った穴の前に縛り、銃殺し、銃剣で女を刺し貫ぬくことを命じたのである。

しかし、この段階になってもなお、「私」には事態の深刻さが見えていない。銃をわかれてきた女と見立て、その虚の時空の中で生きていた「私」には〈虚〉と〈実〉の境界が曖昧であった。その結果、「私」は、工作員と思われる「シナの女」の中に「私の女を求め」、「その女を舐めるように眺め」という始末なのだ。そして、その「シナの女」がみごもっていただけに一層親近感を抱き、女の助け

てという嘆願に「不用意にうなずくのである。しかし、この敵へのやさしさは御法度で、分隊長である「大矢班長」のきにならないところであった。こうしたヒューマンな感性、感情こそまず初年兵訓練の中で徹底的に改造されなければならなかったからである。そこで、班長は、「お前はその女を殺れ！」と命令する。

ここから、「私」の中で事態(世界)は一変していくのである。班長の命令は次のようなものであった。

「お前は百米さきからこの女を射て。射ってから着剣して前進し、五十米前方で突撃せよ。それから突くのだ」

「駈足、進め！」

私はまわれ右をして駈出した。やけつくような砂原が私の軍靴でくずれた。あらされた西瓜畑には実らぬ果実だけがころがっていた。私はその果実をふみつぶして走りながら、その百米がいつまでもつづくことを願った。

「停止！」

声があつい風にのって追いかけてきた。そこで私は又まわれ右をした。

「立ち射ちのかまえ、銃！」

本能的に私は呼吸をしずめかまえた。かまえる相手
が、標的ではなくて、棒杭にしばりつけられた女で
あることをほんと感じたのはその時であった。私
はかまえた。命令は動作を強いるし、がけになつてい
たのだ。銃は目標を照準線に入れようとあせつた。
照星が照門に入ると女の唇が歪んで声がささやい
た。

この子があなたの子供であつたらいいの。そう思
うの。でもね、これだけにして。きっと可愛がられ
なくなるの。そうなつたらおしまい。私はおしまい
になるの。ね、わかる。

私はくらくらと目まいがしそうになつた。目まい
がしそうになつた時、ふと私は女に通う道が銃弾の
通う道であるように思えた。その一直線がそのまま
通う道、胸の底へ、心の底へ、腹の中へ通う道のよ
うに。

「射て！」

軍隊内部では、規律と命令が支配しており、兵士は、そ
の規律と命令に従う「道具」でしかない。兵士は、人間
動物という分割のなかで、おまえたちは動物、馬以下だと

され、そこから抜けて「人間」になるためには、まず、規
律と命令に従い、さらに階級を一つでも上になるようにめ
ざせと徹底的に教育される。事の是非、善悪は問わないし、
実際、ここでは問うてはならないのだ。注5、こうして、
「小銃」では「私がかまえた。命令は動作を強いるしかけ
になつていたので」というわけである。「私」は「射て！」
の命令のもと撃つ。そのとき、「私の銃、イ62377は
私の肩で躍つた。私はそのまま着け剣をして走りだした。
女の首がうなだれているのと、血が胸を染めているのを走
りながら見た。次第に人の姿が大きくなってきた。走りつ
づけるうちに私は道具になり、小銃になり、ただ小銃に重
みと勢と方向をあたえる道具になつた。習いおぼえたよう
に、ふみきると、私の腕はひとりでのびた」ということ
なる。

私の任務と演習は終つた。

「りっぱだ」

「すごい。一発だ」

大矢班長はほこらしげに私の肩をたたいた。

「お前もこれで一人前になつた」

善良な兵士である「私」が規律と命令に従い、「道具」

となつていく様子が語られている。このように、規律と命令に従い、「道具」となつていくことこそ、「お前もこれで一人前になつた」ということの意味である。しかし、「息づいてそのほまれを受けていたのは小銃であつた。イ62377は私の手の中で返り血をあびて主人にこびていた。

こんこんと怒りがわきおこつてきた。大矢班長にはなく、私をたぶらかし、射的から殺戮にとすりかえたこの道具に対してであつた。一人前になつたどころではなく、血管を逆流してくる憤りのために、その場で私は昏倒してしまつたのであつた。自分の意思ではなく、小銃がかつてに動き、「射的」ではなく、「殺戮」の道具となつたことに「憤り」を感じ、一種の精神的錯乱状態に陥り、「昏倒」し意識不明になる。「私」は理解不能の事態に直面すると精神的興奮のため失神する癖があるようだが、ここでもそれがたのであつた。ところで、上官である「大矢班長」は、この「私」の「シナの女」への優しさ、それとその「シナの女」の「殺戮」で卒倒する兵士の凶など今までの初年兵訓練そのものの無効を言い当てられているように絶対に許すことなどできなかつた。ここから「私」の兵士としての齒車が狂いはじめていくのである。

そもそも、「私」がこのような「殺戮」の命令に従順にしたがつたのは、命令は絶対であるという帝国陸軍の軍律

にもとづいていたことはいうまでもないが、その背後には「私」側の事情があつた。中国人の女の唇から、日本の年上の女の「この子があんたの子供であつたらいいの。そう思うの。でもね、これだけにして。きつと可愛がられたくなるの。そうなつたらおしまい。私はおしまいになるの。ね、わかる。」というささやきの「声」が発せられたからであつた。この中国人の女の唇からのささやきの（ことば）は「私」に日本の女と「シナの女」との區別を朦朧化すること、
「女に通う道が銃弾の通う道」で、その弾の「一直線」は「そのまま」、「胸の底へ、心の底へ、腹の中へ通う道のように」混乱、困惑し、一種の錯乱状態に陥つていたのであり、「射て！」の命令に自動的に従うことになつたのだ。こうして、女の（愛）の象徴としての「道具」でもあつた愛銃は殺人の「道具」となり、さらに突き刺すことで、愛銃は「悪魔」と思うほどのものへと変質していき、「私」と女と愛銃の三位一体的な（奇妙な世界）は完全に崩壊したのであつた。

ところで、一般に、（軍）という機構あるいは戦地、戦場においていかに日本人は敵を殺すという不条理、不合理を「命令」として強いられ、仮にそれに異議申し立てなどできるはずもなく、兵士は途方もない人間性の放棄、解体、喪失を強いられる。そしてこの危機を回避する便法として

敵を撃つことは正義であるという軍事教育がほどこされる。

これは自民族第一主義ともいふべきナショナリズムにもとづく一種の催眠療法である。多くの日本兵はこの療法あるいは訓練で、殺害で人が血を流していても気絶(昏倒)することもなかった。「一人前」になるわけである。しかし、普通、これは人を殺すことは悪であるという平和時の観念・感覚と極端な深い精神的な齟齬、矛盾、分裂を抱えざるをえない。この精神的、感覺的齟齬、矛盾、分裂を典型を生きたのが「私」であった。ただ、「私」はナショナリズムによる催眠療法にからなかつた分、兵士としてはいつでも「一人前」になることができない兵士という烙印を押されることになる。実際、「私」は「殺戮」という(現実)の前で精神の制御不能の状態に陥り「昏倒」(失神)している。その後、できるだけその「殺戮」の忌まわしい記憶から遠ざかるべく女遊びに没けたりするが、「シナ服の女」を殺したという罪の意識は消えることなく、水面下でその意識を抱えながら、役立たずの万年二等兵という烙印をおされたまま生きていくことになる。それにしても、こういう精神的な衝撃、疾患に陥った兵士は相当いたと思うし、「私」はそういう兵士を代表していたといえるのである。

【三】 軍隊の病理——排除されていく「私」

小説「小銃」では、当初、極めて従順な兵士が、「シナの女」の虐殺から、しだいに、兵士として「一人前」になることができず、その「一人前」の道から外れていくことになる。この小説「小銃」のすごさは、何度もいうことになるが、この反軍的な兵士の末路をいわば象徴化した形で語っていると云うであろう。

中国の女性を虐殺した後、「私」は銃の手入れを怠り、粗末にしていく。「私」の銃とともにあつた「内地の女は死んでしまい」、また、「夢の中のシナ服の女も私をなやまさなくなつた」が、しだいに「私」は「無力」になつていく。「私」は「外出日に女あそびをおぼえて、朝鮮女を体力のかぎりをつくして喜ばせることに憂身をやつしだし」、その結果私は不名誉な病気を拾い、初年兵のくせに何十里もはなれた大同の街の病院にやられ、「イ62377の小銃はとりかえられ」、もうその「小銃は私の憎悪をふくんだ未練の気持にもあたいたしなかつた」と吐き捨てるようになる。役立たぬ小銃と頹廢した心と体をもって「私」は病院から原隊へ復帰するが、今度は、小銃のユウテイをなぐしたことで、営倉入りとなる。それ以降は、部隊の中のいやがらせ、いじめ、抑圧が一層激しくなり、軍隊内部

で、「私」は恥知らずの兵士として蔑まれ、排除されていくことになるのである。

何もかも遠のいてしまった。武器も被服も兵隊も、故郷さえも、そのぶんだけ私はぼけているわけで、ことごとくにこつきまわされ、何でもない針が一本なくなっても、虱がわいても、そのうたがいが私にかかった。前には射撃の名手であることによつて私をたのしんだ連中はこんどは私の劣性のために私をたのしんだ。幹部候補生の試験はとうにすんでいた。すんでいなくても私はうけることも出来ないし、その気持もおこらなかつた。私は一人だけとり残されて二等兵だった。

幹部候補生の有資格者でありながら、「私」はもうそのことに関心もなく、また普通の昇進、選抜にも意欲をもたなくなっている。こうしたアウトサイダー的な兵士は部隊のお荷物である。ただ、日本の軍隊は国家の構造もそうであるが、上官と兵隊との間に温情主義を採り入れており、この小説では、「師団の射撃大会」での「私」への最後の温情主義が発揮される。

それは班長の私に対するさいごの期待であつたはずだ。私はイ62377の小銃をかしてくれるように頼んだ。この銃はある古参曹長がもつていたが、班長はわざわざ借り出して「そいそとして私にきかせた。

「お前もこれで点数をかせいで拔擢されるのだ。な、一期の頃を思い出して見ろ。あの頃はお前もりつばなやつだった。お前のことはおれが隊長にたのんだのだ。すっかりやれ」

班長は感きわまつて男泣きに泣きだした。

ところが、古参曹長がもつていた「イ62377の小銃」の「ユウティ」は「私」が愛した銃のユウティではなく、紛失したはずのユウティであつた。古参曹長が私の二番目の三八銃からユウティを盗みとり、「イ62377の小銃」の「ユウティ」にしていたということであつた。「私」は一種のいやがらせにあり、その結果、「営倉入り」となつたわけである。「私」はそのことがわかつたので、やる気をなくし、「かしこくも」「天皇陛下」からいただいたものを恐れ多くも「放り出した」のであつた。天皇陛下からの「いただきます」としての銃を投げ出すことは上官からすれば言語道断であるが、ここで班長は古参曹長の不正、いやが

らせを告発する「私」の「頬を軍靴でおさえ」すべてを黙殺しようとする。「私」の代表辞退の申し入れも拒否される。班長は「見ろ。お前の肩の星を、おれなら自殺するぞ。

ここだって毎年一人は自殺するのだからな」と強要し、参加を強要する。そこで、仕方なしに「私は射撃大会に出場し」、しかし、「私だけが零点に近い点をとった。私はねらいもせずにごぶ放した」のであった。これはなかなかできない反軍的な行為であり、いよいよ「自殺」せよという圧力が強まってくることになる。

遂には、その年の秋、討伐にでたとき、川面に映る自分の姿に、意識下に封印してきた殺した女の姿が重なりぎよつとする。

いやこの小銃のためにこそ、おれはこのようにやりきれなく淋しいのだ。私は川にうつる自分の影を見てぎよつとした。あおざめた女が棒杭をしょってこちらに歎願している姿を見たからである。

「私」は熱病を患い部隊から落伍し、ロバに乗せられたまま行軍をつづけさせられ、しまいには、八路軍との交戦のさなか、「祭がはじまった」「踊れ、踊れ」とわめく精神錯乱をおこし、ついには、いまわしい小銃を焼き払おうと

いう行為となり、しかもそれが上官の腹を撃ち、十八年ほどの刑を受けて軍刑務所送りとなり、敗戦で解放されるといふ悲惨で教奇な運命をたどることになる。

【四】 敗戦によって戦後の他の兵士たちが背負わされたもの

武装解除した三八銃が毎日トラックに積まれて到着した。それはそっくりそのまま向うの軍隊のものになる筈だった。私は機械のように、上から放り投げられるのを下で受けとめて暮した。

「ほい、ほい」

と調子を合せながら慌しいその動作を無感動でつづけていると、私はふと握りしめた掌の中で何か血の通ったような感じがした。私は見ずしてそれがイ62377の小銃であることを知った。して見ると私は忘れていたが掌はおぼえていたのだ。

長い遍歴のあとのめぐりあいである。

眺めてみると床尾飯はもとより銃身からユウテイまで、鉄の部分はみんなさびていた。銃床はかわり切り、床尾飯の金具がガタガタに浮いている。あああの女はどうしたろう。内地へ辿りついた夫を抱い

ているか、それともこの銃のように死に萎えているか。ああどうしているだろう。私はつぎつぎと上から落ちてくるこの道具をうけとめながら口ずさんだ。

慎ちゃん、可愛がられたくないの。可愛がつてあげたいの。ね、だから分つて。

シナの兵隊の何故か私をにくむ眼がせまってきた、さつと鞭がひらめいた。

終章は終戦後のことであるが、すでに述べたように記憶喪失に陥る直前、精神の錯乱状態の中で、「私」は小銃を焼き払おうとして班長に斬りかかられ、銃が暴発して班長の腹を撃ち、彼は軍刑務所に収容された。そして、終戦の翌年に帰国を待ちながら天津の貨物廠で中国人の使役に携わっていた。そこで、偶然、武装解除して回収される三八銃の中にあの愛銃をみつける。銃はボロボロであったが、それでも、内地の女のことか思い出され、女の「慎ちゃん、可愛がられたくないの。可愛がつてあげたいの。ね、だから分つて。」というささやきの言葉が呼び覚まされる。しかし、銃は、それ以上のものを喚起する力にはやななかつた。「私」にとつて女はもはや了解不能の他者でもなければ、「母」でもなく、ただの嘘つきの女でしかなく、その

ささやきの（ことば）はふざけたからかいの対象へと変質していた。注6、女は忘却の彼方へと消えていた。ただ、日本語が分からない「シナの兵隊」にとつては別な反抗的なことばのように受け止められ「何故か私をにくむ眼がせまってきた、さつと鞭がひらめいた」のである。確かなことは、「私」は「シナの兵隊」に「私をにくむ眼」を感じおり、「私」の（中国）への罪の意識と恐怖感に晒されているということであろう。「私」は中国（人）に追い立てられるように「死に萎えて」びくびくしながら帰国の「時」を待っているのである。

一体、どうしてこのような運命を「私」はたどることになったのか。

「私」は「ひとよりよけいに動き気が利き可愛がられる、それが二十一歳の兵隊である私にはうれしかった」という素朴な青年であった。そのいわば普通の善良な青年が、軍の中でもっとも差別され軽蔑されるだろう反軍的な兵士、人物になるところにこそ、この小説の真骨頂、アレゴリックさがあるろう。どうしてそのようになってしまったのかと言えば、それは「私」の持っている生来的な「弱音」（やさしさ）のためであった。その典型的な事柄が、「シナの女」と分かれた女とを同一視して、助けてという「シナの女」の「嘆願」に「うなづいた」ところに認められよう。

事態の深刻さがわからないということではなく、わかったとしても嫌とはいえない優しさがあり、それが上官の命令に対して無条件に反応するのではなく、かわいそうとか気の毒とかの同情心を抱くことで、作戦に停滞をもたらしてしまうことになり、軍隊内部では忌み嫌われるのである。班長は「私」の行動、しぐさにその「弱音」を読み取り、「一人前」にすべく「シナの女」の虐殺を命令したのであった。

そして、もう一つはユウテイ事件が明らかのように、不正を不正として見過ごすことができない真正直で潔癖な人間であつたということであろうか。軍隊内部では、その不正が仮に分かつていても、幹部がやったことなら目をつぶり、しらないふりをするということが暗黙のルールで、常識となつているから、「私」はその軍隊の文化とぶつからざるをえなかつたということである。

しかし、それにしても、命令に無条件にしたがい、不正や多少のいい加減さには目をつむり、無批判的で、機械的な「道具」となることが果たして評価されることなのか。命令に対して思考を停止し、またそういう理不尽な命令をだす上官に気に入られるべく付度して行動することが果たして人間として評価されることなのか。小説「小銃」の「私」はその限りで言えば、限りなく「無器用」な男であつた。

注7、その「無器用」さ、あるいは真正直さが「私」をもつとも反軍的な兵士にしてしまったという逆説がここにはある。

ところで、「私」のような軍に歯向かう男ではなく、命令に従い、二等兵から上へと昇進していったその他の多くの兵士たちとはそもそもなんであつたのか。彼らは上官の命令には無条件に従い、しかも上官の気持ちを付度することが昇進のための技法なのだとか割り切り、戦後の社会において見事に適応して生きたとすれば、その（戦後）とは果たして本当にノーマルな社会であつたのか。中野重治は「五勺の酒」の中で、この精神的退廃を国民道徳の退廃として告発したが、小島信夫もまた、この「小銃」において、「私」の対極にあつた多くの兵士たちのむこうにこの軍隊の中で育成された精神のそのままの復活を見たのであり、そこにやはり戦後の精神的退廃をみていたのではないか。上官の命令には無条件に従い、しかも上官の気持ちを付度することが昇進のための技法なのだとか割り切り、悩むことはしない、その意味で「弱音」をはかない、その実、異質な意見や多様な人間の存在や立場を認めることを「弱音」Ⅱ（軟弱）として排除してきたこの軍隊内部の狭くて貧しい精神こそ日本の戦後の精神の中心を担ってきたのであり、筆者はこの戦前と戦後にまたがる共通の感性を、他者、外部を

喪失した一國主義的な上昇価値、幸福、生きがいとする価値意識、アイデンティティーとして批判してきたのである。注8、実際、この感性あるいは価値観こそ日本の近代を貫く日本型ナショナリズムの本質にほかならなかった。

いうまでもなくこの戦前におけるナショナリズムの価値の中心には天皇がいた。戦後はその天皇に代わって「民主主義」になったわけだが、日本型ナショナリズムの中心、本質である他者、外部を喪失した一國主義的な上昇価値、幸福、生きがいとする価値意識、アイデンティティーはそのまま残ったのであり、これは、野放図に膨張、肥大化していくことになった。すなわち天皇に代わっていたるところに「小天皇」を生み出し、戦前の天皇への献身に代わって、いたるところで「小天皇」たるさまざま「長」（社長、校長など）への邁進がはじまり、まさに日本型のパブル社会を実現したのであった。こうして戦後の「自由と平等」の民主主義は野放図な資本主義が君臨する「欲望の帝国」へと変質していったのであった。日本型ナショナリズムの本質、中心であるところのこの他者、外部を喪失した一國主義的な上昇価値、幸福、生きがいとする価値意識、アイデンティティーは、どんなに時代が経過し、変化、発展しようともその時代時代をいつも自分の都合のいいように上書きすることで、本質において戦前の「日本」と変わらな

い「帝国日本」の風貌を世界あるいは東アジアの人々に示してきたのである。

それにしても、戦後に生き残った、いわゆる「器用」な兵士や人びとが本来、克服すべき、反省すべきものとして本来抱えこまなければならなかったのは、こうした日本型ナショナリズムの中心、本質である立身出世的な価値意識やアイデンティティーだけではなかった。なるほど、彼らは生き残ったことへの罪障感を抱え苦悩してきた。しかし、生き残ったことへのこの罪障感は死んだ兵士たちへの申し訳なき、罪の意識でしかなく、本来、克服すべきものとしてあげた価値意識の問題や何の罪もなく殺された側の人間の痛みの共有といったところまで届くはずがなかった。

では、戦後に生き残った、いわゆる「器用」な兵士や人びとが本来、まず立ち向かわなければならなかったことは何か。それは、ナショナリズムⅡ（自民族中心主義）によつて正当化されてしまった敵を殺すことは「罪」ではないという考えとまず立ち向かうことであつた。一体、他民族排外主義というナショナリズムの抱え込んでしまった倫理的退廃の「闇」とは、平時では許されることのない敵を殺すことの「罪」を許されるものとして容認したことである。それは、人を殺す行為の原罪性を隠蔽してしまつたということであつた。ところが、戦後のわれわれは、ナシヨ

ナリズムの持つこうした倫理喪失のマイナスⅡ(闇)と、
どれだけ真剣に向かい合ってきたというのであろうか。注
9、実は、ほとんどその行為の現場、場所において自分は
何をしたのか一人一人、真剣に向かい合っただけでもなく、
むしろ積極的に忘却しようとして今にいたっているのでは
ある。たしかに、人を刺し殺した時の感觸の地平・現場での
反省の(ことば)を本当に証言した日本人はほとんどとい
ってほどいないので、圧倒的多数の日本の兵士たちは、そ
れを語ることは恥、不名誉、非国民として、そのことから
逃げるか沈黙したのであり、その限りで、日本人は戦後七
十五年たった今でも、敵を殺すことは(罪)ではないとい
う一種の倫理喪失の催眠状態からいまだ覚めていないのだ
と言える。仮にそこに触れたとしても自分がそこで具体的
に何をしたのかということ語ることはなく、一般的で観
念的な反省の(ことば)、たとえば戦争は絶対すべきでは
ない、戦争はよくないといったことで終始してきたのであ
る。しかし、このレベルの反省の(ことば)を何千、何万
回、繰り返そうとも、たとえば中国、韓国などの東アジア
の戦争の被害者たる人々の(こころ)に届くはずがなく、
したがって、どこまでも反省心のない民族として不信感を
もたれ続けているのである。

ところが、小島信夫の「小銃」では、戦争が兵士を精神

の錯乱状態へと導くのだという残酷な事実を突き出してみ
せるとともに、終末部では中国人を殺したことに怯える兵
士であった「私」を語っているのである。生々しい(虐殺
の記憶)の問題、その忘れがたい不気味さ、怖さ、罪深さ
に怯える「私」を提示してみせたところに、語り手(私)
の「器用」な日本人(兵士)に対する批判が込められている
とともに、安易に発出する戦後への痛烈な批判、批評がこ
められていたのであった。

さて、そうなると、少なくとも、「小銃」が人間の「無
垢な」あるいは(「フアンタジック」な「魂」が「現実の
苛酷な力」(戦争)によって踏みつぶされていく物語といっ
たとても軽いレベルのテキストでは全くなかったというこ
とは明らかであろう。注10、

そして、このことはまた、これまでの小島信夫あるいは
第三の新人の文学の意味、価値そして評価を根本的に見直
さざるをえないだろう。ただ、筆者には今、そこまで論じ
る力も余裕もないので、この問題については他日に言及し
たいと思う。

注1、小島信夫は、「著者から読者へ 初期作品群のテー
マ」(小島信夫『殉教・微笑』(一九九三・一二)講談社文

芸文庫 所収)の中で、「小銃」では、戦地で目撃してきた「無器用な人達」、上官を殺したとか逃亡して捕まったとかいう人たちに「主人公の身の上をなぞらえた」と述べている。

注2、「小銃」(小島信夫と安岡章太郎(特集))、『国文学解釈と鑑賞』一九七二年二月)

注3、「解説」(『日本文学近代短篇小説選 昭和篇3』二〇一二年一〇月岩波文庫) 所収

注4、この読みの視点からすると、たとえば、集英社の文庫とびら(小島信夫『小銃』(一九七七・一二 集英社文庫)の「軍隊生活のどん底で、望郷の思いをたくした小銃とのめぐり合いをユーモアをまじえて描いた」小説でないことは明らかであろう。また、立石伯が「犯罪 小島信夫『小銃』」(『国文学 解釈と教材の研究』(二〇〇七年一〇月)のなかで指摘しているようなリアリズム風の(小説)というわけでもあるまい。もっとも、この点について、立石自身、この小説が第一次戦後派の作家たちの描いた戦争体験の小説とは(異質)だと捉えているのだが、それが何かまで述べられているわけではない。なお、この点について、千石

英世は、「暗示の文学、鼓舞する寓話——追悼小島信夫(『小島信夫 暗示の文学、鼓舞する寓話』二〇〇六・一二 彩流社所収)の中で、「小島信夫の文学が暗示の文学、あえていえば寓喩の文学、寓話であった」と指摘している。

注5、村上克尚は、「日本戦後文学における動物の表象について」武田泰淳・大江健三郎・小島信夫を対象に(二〇一六・二・二九 東京大学学術関リポジトリ)のなかで、「戦争の場において、人間/動物の境界線は、他国の侵略・植民地化、戦場での殺人を正当化する根拠として機能すると同時に、自国の国民を兵士へと教育し、軍隊に同一化させる際にも機能している。戦後社会において、人間/動物の境界線は、他国の国民の苦しみに目をつり、主権国家を立ち上げていく際に、国内の犯罪者を「異常なもの」として処罰する際に、あるいは占領者への抵抗を組織する際や、学校における規律訓練教育の際にも機能している。最後に家庭において、人間/動物の境界線は、家庭規範に沿うことのない男性、女性を処罰する際に機能しているのを確認できる。このように、近代主権国家においては、あらゆる場所で、人間/動物の境界線が機能している。」と指摘している。

注6、金子博は、「(他者)論のためのノート…小島信夫をめぐって」(特集 近代文学における(他者)) 日本文学一九八八・一〇)の中で、「女と「私」とは、「母」と「

天皇制」というタブーを犯す恋をしたのである。しかし結局女は現実を選び「妻」「母」に戻っていく。」と鋭く指摘した上で、しかし、「私」は、二六歳の年上の女性を「切なく」「母」として「憧れ続け」ていると述べている。しかし、本稿で考察してきたようにそうなっていない。「小銃」は、江藤淳の『成熟と喪失・(母)の崩壊』(一九六七河出書房)文脈に回収されない豊かなものを持っており、軍隊の中で訓練(教育)という名のもとにどんな惨劇(精神の錯乱)がおこなわれているのかをまず語ろうとしている点に着目しておきたい。

注7、注1の「戦地で目撃してきた「無器用な人達」」参照

注8、拙著『文学の中の他者——共存の深みへ』(一九九八青柿堂)

注9、ナシヨナリズムが民族解放、あるいは抵抗の思想と

しての側面をもった場合もあり無条件に否定するのは乱暴であろう。ただ、指摘した倫理的負の側面はしっかりおさえておきたいと思う。この(負)暗の側面への反省の欠如が安易な戦争肯定論へと道を開いている。

注10、大澤信亮は、「解説」「人の極み」(『城壁・星 小島信夫戦争小説集』二〇一五・七 講談社文芸文庫)のなかで、小島信夫が「カメリカン・スクール」から「抱擁家族」へと続く文脈で読まれることに異議を唱え、戦争小説集の流れは「どんな言葉にも解消できない」「小島の原点」だという捉えかたをしている。